

教室以外の場所（保健室，相談室等別室）での対応

保健室をたびたび訪れたり，保健室や相談室等への別室登校をしたりする子どもたちに対して，どのように対応すればよいのでしょうか。

養護教諭やスクールカウンセラー・「心の教室相談員」は，来室した子どもたちをさりげなく見守ったり，相談したりする中で，学級担任が教室や日常生活において観察しにくい状態を早期に発見し，指導の糸口をつかみやすい立場にあります。

不登校のさまざまな状態の中で，子どもたちをこころよく受け入れてくれる養護教諭のいる保健室やスクールカウンセラー・「心の教室相談員」のいる相談室は，小さな心のオアシスのようなものです。

保健室等，教室以外の場所（以下「別室」と記す）を心の居場所に選んだ子どもたちには，学校生活に適応させるための第一段階として，登校が安定するまで過ごさせる場合があります。別室であれば来られるという子どもたちにとっては，大事な居場所です。そのため，全職員がそのような子どもたちの状況を知り，理解していることが大切です。



〔登校しぶりが始まった時期の対応〕

不登校の初期には，頭痛や腹痛・倦怠感等の身体症状を示す子どももいます。そのため，まず病院への受診を勧め，原因らしいものが見つからなかったときには，「心配しなくていいよ」という安心感を与えることが必要です。

別室で過ごす時間が長くなってきた場合は，その子どもの行動や反応のしかた等をよく観察し，少しずつ別室にいる時間を短くして，教室へ復帰できるように，学級担任との連携を密にしていけることが大切です。

〔再登校し始めた時期の対応〕

いったん不登校になった子どもが再登校するのは、とても大変なことです。学校へ復帰することに対して、情緒的な緊張が伴い、身体症状の再発を招くこともあります。

そのため、別室は長い間、居場所としてきた家庭や治療機関から、学校生活に慣れるための緊張を緩和させる場所になる場合があります。

別室への登校は、「別室なら行ける」という本人の訴えからスタートします。登校する様子はさまざまで、

- ・ 別室のみに登校する。
- ・ 別室以外にはほとんど行かないが、特定の授業や行事には参加できる。
- ・ 別室に登校し、精神的な安定を得てから、教室に行く。

などの場合が考えられます。また、放課後に登校させて、学級担任や他の教職員と話をしたり勉強したりするなど、一人一人の子どもの状態に応じた配慮が必要になります。

別室への登校は、本人・家族・学校にとっても、コミュニケーションの機会が確保しやすいので、再登校には有効です。

〔別室での対応のポイント〕

- ・ 教室にいられない理由を問いつめたりすることがないように、受容的な態度で接する。
- ・ 子どもに寄り添って話を聴くことで、信頼関係をつくる。
- ・ 子どもの状態が安定してきたら、別室にこだわらず、徐々に行動範囲を拡げていけるようにする。
- ・ 他の教職員や友だちへの働きかけを求め、本人の状態に合わせて、人間関係を拡げていくようにする。
- ・ 学級担任を通じて家庭との連絡を密にし、学校や家庭での子どもの様子を情報交換しながら、学級担任とともに見通しをもった段階的な支援をしていく。
- ・ 本人のよいところやできたところを認め励まし、学習や学校生活への自信や意欲を取り戻せるようにする。

再登校するときの受け入れ

再登校するときの受け入れには、どのような配慮が必要でしょうか。

長い期間、学校を休んでいて再び登校を始めた子どもは、問題がすべて解決して、すっきりした気持ちで登校しているわけではありません。そのため、再登校する子どもを受け入れる学級・友だち・教職員のきめ細かい配慮が必要となります。

担任としての配慮

〔学級担任の心構えと言葉がけ〕

不登校の子どもが再登校したとき、学級担任として気負ってしまいがちですが、不安な子どもの気持ちをくんで自然に声をかけるようにします。子どもに対する問いかけも「はい」「いいえ」のような簡単な返事ですむものがよいでしょう。

登校してきたことに対して「がんばったね」と評価したり、「明日もがんばって来なさい」と言ったりすることは、子どもを励ますつもりでも、本人にとっては負担になることもあります。また、急に予定を変更すると、子どもに不安を与える場合もあります。子どもの気持ちを考えた働きかけが必要となります。

〔対人関係への配慮〕

不登校の子どもは、対人関係に不安をもっている場合が多いので、座席の位置にも配慮する必要があります。一人ぼっちになることに不安をもっている子どもに対しては、休み時間などに「一緒に遊ぼう」、教室移動のときには「一緒に行こう」など、自然な形で声かけができるように、事前にクラスの子どもに話しておくことも大切です。

〔再登校初日には必ず保護者と連絡を〕

再登校初日は、子どもの下校後、必ず保護者と連絡を取り合い、学校での様子や帰宅後の様子について情報交換を行い、状況を把握する必要があります。その後も必要に応じて連絡を取り合うことが大切です。

〔その他の配慮〕

久しぶりに登校するとき、事前に登校のリハーサルをしておくことで登校しやすくなります。また、登校が定着するまでは、遅刻・早退に対しては柔軟に対応することが大切です。

学習に対する不安をもっている子どもに対しては、個別指導をしたり、学習量の軽減を考えたりすることも必要です。

小学校においては、給食への配慮も必要な場合があります。

学級の雰囲気づくり

〔学級の一員として〕

欠席が長くなったり，学年始めから休みが続いたりしている場合には，学級の子どもたちから忘れられる心配があります。そのため，学級担任は機会あるごとに，休んでいる子どもを話題にして，休んでいても学級の一員であるという親近感をクラス全員にもたせることが大切です。また，机・いすやロッカー，靴箱などは常に整頓しておいたり，配付物や連絡などは時機を逸することなく家庭へ届けたりするなどの配慮が必要です。

〔学級の実理と協力を得るために〕

学級の実理と協力を得るため，“登校できない”ということについて，学級で話し合いをもち，子どもたちに理解を深めさせることが大切です。

また，中学校では，教科・行事・部活動でのつながりを考えて，学年全体の理解が必要です。

〔温かい学級づくりを〕

不登校の子どもは，再登校するとき，他の人が自分をどのように見ているかといへん神経質になっています。再登校したときには，温かく自然に迎え入れることができる雰囲気をつくっておく必要があります。



教職員間の共通理解

〔すべての教職員の理解と協力を〕

再登校してきた子どもに学級担任だけがかかわるのではなく，すべての教職員の理解と協力が必要です。特に中学校では，教科によって担当教職員が変わるので，ますますその必要が生じてきます。

学校の中ですべての教職員が，その子どもの状態や対応に関して共通の理解をもっていないと，学級担任と他の教職員との間で対応がちぐはぐになり，かえって子どもを混乱させて不安を強め，逆戻りさせてしまう場合もあります。再登校する子どもについては，学級担任が中心となって，他の教職員へ子どもの様子や配慮すべきことなどを説明し，気持ちよく再登校できるように協力を得ることが大切です。